



Title	『鎮魂歌』の運命：1950年～1965年(連作第三部)
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 1985, 70(2), p. 33-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『鎮魂歌』の運命

— 1950年～1965年 —

(連作第三部)

武 藤 洋 二

СУДЬБА “РЕКВИЕМА”

МУТО Ёдзи

Содержание

1. Пережить Сталина!
2. Между жизнью и смертью.
3. Вред и польза перевода для опальных поэтов.
4. Апология Хрущева.
5. Судьба “Реквиема”
6. Три маленькие книги.

Примечания

1

「一番たいせつなことは、スターリンより長生きすることだ。スターリンより長生きする者は皆、生き残れるのだ。わかるかね。何百万もの人間の呪いが物になって奴の頭をおそわないはずがない。わかるかね。奴は、万人の憎悪から必ず死ぬ。奴は、癌か何かにかかるだろう。わかるかね。われわれは更に生きていくことができるのだ。」¹⁾

スターリン時代ルイセンコ学説に従わない生物学者は、追放され、投獄された。ルイセンコは、スターリンにとって最もつごうのよい農業技師としてソヴェトの農業を指導し、生物学会にスターリンの分身として君臨した。メンデル、ワイズマンの信奉者は、スパイか売国奴のように呪われた。

シヤラーモフの『コルイマー短篇集』に、『ワイズマン主義者』という一篇がある。ワイズマン主義者としてコルイマーの収容所にいられているウマンスキイ教授は、1946年のある日、収容所内の病院の死体置場で「スターリンより長生きすることだ」と若い囚人をはげました。ウマンスキイは、スターリンの死の前日に死んだ。

スターリンより生きながらえる、権力の性質が変わるまで待つ——これは、記憶係に自分の詩を覚えさせていた²⁾ アンナ・アフマートヴァの生き方と共通する。彼女は、詩を紙に書くのをやめ、

権力が没収することのできない記憶のなかに詩を保存した。記憶係チウコーフスカヤには、スターリンより長生きして、次の時代へ詩を伝える義務があった。

スターリンは、1953年3月1日の夜から未明にかけて、脳出血でたおれ、右半身がまひし、意識を失い、3月5日に亡くなった。解剖の結果、スターリンは、心臓が肥大し、脳の動脈が硬化した老人であったことがわかった。

スターリンは、死の少し前に生涯最後の脚本を書いた。それは、「医師団事件」³⁾と名づけられた。

30年代後半の「モスクワ裁判」や40年代末の「レニングラード事件」と同じように、この「事件」の奇想天外な性格、現実からのはるかな距離は、脚本家である独裁者が、民衆からの反作用を恐れなくてすむほど、民衆をおさえつけていたことを意味する。もし世論が存在し機能するなら、脚本は現実味をおびるように工夫しなければならない。スターリンには、この必要はなかった。

2

農村集団化の流血を知った時、オーシプ・マンデリシタームは、独裁者を呪う詩を書いた。それは、キーロフ暗殺をきっかけにして空想裁判や人間狩りがおこなわれる前夜であった。

スターリン治下のソヴェト人には

足もとに祖国なく

十歩はなれば話し声はきこえない。⁴⁾

人びとは、ひそひそ声でしか話しができない。自分たちが踏んでいるのは、母なる国の大地ではない。母なる国は、スターリンによって、きき耳をたてる継母にかわった。

ちょっと話ができるところでは

クレムリンの山男がうわさにのぼる。⁵⁾

皆の関心は、コーカサスの山国出身の独裁者にあつまる。スターリンは、側近である「半人間たちの奉公をもてあそび」⁶⁾、

蹄鉄のように次から次へと指令を打だす—

ある者には鼠蹊部へある者には額へある者には眉へある者には目へ。

どんな処刑があろうとも自分は結構な住し。

オセチン人⁷⁾の広い胸よ。⁸⁾

マンデリシタームは、この詩について密告され、「半人間たち」の一人ヤゴダがじきじきに署名した逮捕状によって1934年5月13日にとらえられ、流刑になり、とどのつまりには、収容所の手前で行きだおれになって死んだ。

マンデリシタームは、追手がきたと妄想して病院の窓からとびおり、手を折った時、妻ナジェージダは、党中央委員会に嘆願の電報を打った。スターリンは、自分を誹謗した詩人に独裁者の鷹揚

さをみせた。彼は、詩人の流刑地を変える許可をあたえた。

パステルナークは、その前にマンデリシターム救出をブハーリンにたのんだ。スターリンは、ブハーリンから手紙をうけると、パステルナークに電話した。

スターリン「なぜマンデリシタームのために奔走してやらなかったのかね。もしも私の友人の詩人が災難にあったら、助けようとして私は必死になるだろうね。」

パステルナーク「もしも自分が奔走しなかったら、あなたはこの件を知らなかったでしょう。」

スターリン「なぜ私かあるいは作家の団体にもちこまなかったのかね。」

パステルナーク「作家の団体は、1927年以後このような問題をあつかいません。」

スターリン「だが彼は君の友人でしょう。(短かい沈黙) 彼こそは名手、名手でしょう。」

パステルナーク「それは何んにもなりません。(パステルナークは、マンデリシタームのスターリン誹謗の詩を知っているかどうか試めされていると感じた。) なぜわれわれはマンデリシターム、マンデリシタームとあいもかわらず云うのでしょうか、私は、ずっと前からあなたと話がしたかったのです。」

スターリン「何について。」

パステルナーク「生と死について。」

(スターリンは電話を切った。)⁹⁾

パステルナークは、もう一度スターリンに電話をとりついでくれるようたのんだが、ことわられた。詩人の「生と死」をおもいのままにできる権力者にたいするあてつけととったのか、スターリンは、一方的に電話を切った。パステルナークは、自からだした「生と死について」宿題をかかえたまま生きていくことになる。彼は、この電話のあと長いあいだ詩が書けなかった。しかし、当時、スターリン讃歌を書いていた詩人もふくめてすべての詩人が、自分の「生と死について」宿題をかかえていた。「指導者」と芸術家のこの関係は、生と死との関係だと、ショスタコーヴィッチも自分の実感から語っている。¹⁰⁾

マンデリシタームは、スターリンのおかげで移ることのできた新しい流刑地ヴオローネシで、国家権力への動物的な恐怖から1937年1月スターリン讃歌を書く。しかし、この自己保存の試みは、手おくれであった。

出しおくれたスターリン讃歌は、詩人としての自己への裏切りである。彼は、悪事をはたらいたような気持になった。ヴオローネシでは、「滅亡を受身で待つか、助かる試みをするか」¹¹⁾の二つに一つであった。しかし、この二者択一のさいころは、どちらへころんでも死をふりだしたのである。

「1937年の始めを、マンデリシタームは、自分自身にたいする野蛮な実験ですごした。『讃歌』のために自分をふるいたたせ、自分をその気にさせようとして、彼は、自分で自分の精神を破壊した。『これは病気だった、今になって分ります』と彼は、アフマートヴァに云った。」¹²⁾

讃歌はできた。しかし、詩人は、シヤラーモフの世界に送られることになる。ヴオローネシを去

るとき、恥辱の物証である役にたたなかった讃歌を処分するように、友人たちはマンデリシタームに忠告した。詩人もそれを望んだ。しかし妻ナジェージュダは、讃歌を抹殺する仕事をことわる。

「私は、そんなことをしない、なぜなら、真実が不完全なものになってしまうからだ。二重生活は、われわれの時代の絶対的な事実であり、だれもそれをまぬがれなかった。ただこのような讃歌を他の詩人たちは自分の家や別荘でつくり、褒美をもらったのである。ただマンデリシタームだけが、これを首になわをかけられてやったのである……アフマートヴアは、息子の首のなわが締められた時、それを書いた。このような詩を書いたからといって誰れが彼らを責められるだろうか。」¹³⁾

3

生と死のはざまにあって、詩人たちは、生活費の源、一時的な逃げ場として翻訳をえらんだ。翻訳は、彼らを助け、同時に、滅ぼそうとした。

マンデリシタームは、詩人が翻訳することに反対していた。彼は、パステルナークを翻訳しすぎると批判した。

「創造の力が翻訳で失くってしまうことを、マンデリシタームは知っていた、だから、彼に翻訳させることはほとんど不可能であった。」¹⁴⁾

アフマートヴアのこの証言にもかかわらず、マンデリシタームも、また、翻訳をせざるをえなかった。詩人としての活動が不可能になったとき、詩人には翻訳以外に生活費をかせぐすべはなかった。妻ナジェージュダは、彼が金のために翻訳した例をあげたあと、スターリン時代の詩人にとって翻訳が何であったか説明している。

「翻訳は、すでにその頃、文学を滅ぼすためのすぐれた、まれにみるほど効き目のある方法として利用された。詩であれ散文であれ、おしつけられた翻訳は、あらゆる思想を消してしまい、言葉を殺してしまう。翻訳をめぐる空しい議論の後で考えたり話したりする余力のある人はいるだろうか。」¹⁵⁾

翻訳が創造の邪魔になるという点でアフマートヴアも同じ考えである。

「パステルナークは家でだめになっていきます……自分の詩をもう彼は書いていません、なぜなら他人の詩を訳しているからです——他人の詩を翻訳することほど自分の詩を滅ぼしてしまうものはないのです。ロジンスキイは、翻訳を始めると詩を書くのをやめてしまいました……」¹⁶⁾

シヨスタコーヴィチは、パステルナークとアフマートヴアが翻訳にたずさわっていることを心配した。

「彼らは、翻訳によって自分の才能を葬っている。」¹⁷⁾

翻訳が経済と政治の二つの理由でおこなわれていること、そこにパンと恐怖があることを知りつくしながらも、シヨスタコーヴィチは、詩人が翻訳することに反対する。

「パステルナークが、『ハムレット』や『ファウスト』を訳したとき、それは彼を豊かにしたか

もしれない、しかし彼は、また、三流の全く無名の詩人、たくさんのグルジアの詩人を翻訳した。これは、スターリンを喜ばせる方法、一つの方法であった。同じことがアフマートヴァにも起った。¹⁸⁾

詩人も作曲家も、どのような状況下でも、創作をやめてはならない、とショスタコーヴィチは語る。

「チャイコフスキとリームスキ・コールサコフは、おたがいに好きではなかった。そして、意見が一致することは、めったになかった。しかし、彼らは、次の点では同じ意見であった。たえず作曲しなければならない。もし大作をつくれぬなら、小曲をつくりなさい。もし全然作曲できないなら、何かを交響曲に編曲しなさい。ストラヴィンスキもこの点で同感だったと思う。」¹⁹⁾

アフマートヴァも、同感だった。しかし、彼女も翻訳なしには生きられなかった。詩の発表が許されない1930年代に、彼女は、ルーベンスの書簡集を訳している。²⁰⁾ 彼女は、また、収容所のレフに差し入れをするためにも翻訳した。彼女は、死ぬまでに数冊の訳詩集を残した。²¹⁾

1952年8月、まだレフが収容所に入っているとき、どこかの出版社から翻訳の依頼人がアフマートヴァのところに来た。そのやりとりをそばで聞いていたチウコフスカヤは、アフマートヴァにたずねた。

「おぼえていますか、うんと前にレニングラードで、あなたは決して翻訳しないだろうと云いましたね。」²²⁾

アフマートヴァは答えた。

「今となってはもうどっちみち同じことです、しかし、創作の時期には詩人はもちろん、翻訳してはいけません。それは、自分の脳を喰うのと同じことです。」²³⁾

アフマートヴァは、創作する人間にとっての翻訳の危険性を知りつくしながら、病身にもかかわらず翻訳の賃仕事をせざるを得なかった。

しかし、翻訳は、ある者にとっては、全く別の役割を果たした。自分の良心を守るための、精神的奴隷にならないための逃避の手段でもあった。ナジェージダ・マンデリシタームは、ゼンケーヴィチの例をあげている。翻訳は、「官許の文学をつくることのできない文学者にとって、唯一の生存手段であった。」²⁴⁾ これは、良心を売るよりも、翻訳を売る方を選んだ詩人の例である。

アフマートヴァは、ロジンスキやゼンケーヴィチのように、翻訳しなかった。彼女は詩人でありつづけた。翻訳は、囚人の母親としてのアフマートヴァに奉仕した。彼女は、翻訳をしたが、それに身をゆだねなかった。彼女の場合、翻訳は、時間と精力をうばい、創作を脇へ追いやったこともあったが、結果的には、詩人の二重生活をささえることに貢献した。

シヤラーモフの主人公ウマンスキ教授は予言した。

「スターリンの死——これこそがわれわれに自由をもたらすのだ。」²⁵⁾

独裁者の死は、詩人における「生と死について」の宿題を解くだろうか。例えば、手段としての翻訳から詩人を解放するだろうか。

スターリンの死後、彼の側近、マンデリシタームのいう「半人間」たちが、権力をにぎった。首相には、マレンコフ、第一副首相には、ベーリヤ、モーロトフ、ブルガーニン、カガノーヴィチがなった。これらは皆スターリンの分身である。

スターリン時代モスクワで小話がささやかれた。

「スターリンは、一昼夜に24時間働いている」

「肉体的にどうしてそんなことができるのかね」

「わけないさ、8時間は本名で働いて、16時間は、『カガノーヴィチ』と『モーロトフ』という変名で働くのさ」²⁶⁾

首相マレンコフは、大粛清の最高指導部であった保安特別委員会に加わっていた。弾圧の直接の担当者であったベーリヤは、筆頭の第一副首相になった。国家保安省と内務省が統合され、内務省一つになり、ベーリヤが内相になった。与えられた粛清の脚本を法廷で演出した検事総長ヴィシンスキイ²⁷⁾は、外務次官、国連常任代表に任命された。

党の最高機関である中央委員会幹部会には、マレンコフ、ベーリヤ、モーロトフ、ヴォロシロフ、フルシチョーフ、ブルガーニン、カガノーヴィチ、ミコヤーン、サブローフ、ベルヴウーヒンが入った。

スターリンの死後一カ月たった1953年4月4日に、クレムリンの医師団が釈放された。これは、新しい権力者たちの間の権力闘争と関係があった。白衣の毒殺者たちが、実は、スターリンによって濡衣をきせられたにすぎないことを政府が認めたのである。これは、当然スターリンそのものの絶対的権威を傷つけることになる。スターリンおよび保安機関の責任追求へ向わざるをえない。7月10日ベーリヤ内相の解任と党からの除名が公表された。

9月12日フルシチョーフが党の第一書記に就任する。スターリン時代の書記長は、同等者中の第一人者を意味する第一書記に名称が変えられた。

12月23日ベーリヤの銃殺が公表された。フルシチョーフは、ベーリヤとの権力闘争に勝ち、保安機関の幹部は粛清された。1955年2月8日マレンコフは、首相を辞任し、フルシチョーフは、権力確立と平行して非スターリン化政策をすすめていく。非スターリン化は、フルシチョーフに権力をあたえ、政敵たちを失脚させた。

次の年1956年2月14日から開かれた第二十回党大会で、スターリン批判がおこなわれた。全知全能の独裁者、全国民の教師であり恩人であり諸科学の泰斗であり、生きているうちから無数の贈り名をもらったスターリンは、フルシチョーフによって、血だらけの暴君であり、権力亡者であったことが暴露された。神から悪魔への引きおろしは、民衆をはばかり秘密会議でおこなわれた。

同年6月30日、党中央委員会決定『個人崇拜とその所産の克服について』が発表された。これは、第二十回党大会の路線とそれに対する国内外の反応とをふまえてつくられた弁明の文書である。フル

シチョーフたちがスターリン批判をおこなえばおこなうほど、スターリン時代にたいする自からの責任をうかびあがらせることになる。彼らは、責任追求にたいして備えなければならない。二十回党大会は、「個人崇拜」という表現でスターリン問題をくくってしまった。この表現の限界内に問題をとどめ、とじこめ、党そのもの、社会主義国家の性格そのものに批判がむけられないよう鉄柵がもうけられた。

「個人崇拜」という表現は、まるで民衆が自発的にスターリンをあげたために起った現象を意味するような錯覚をあたえる。スターリンと民衆との間から党が脱けおちてしまう。

スターリンの神格化は、党によって日常的に組織的におこなわれた。「個人崇拜」を民衆にうえつけるのが党組織の業務であった。

フルシチョーフたちによるスターリン批判は、党を免罪にする点で一貫している。

フルシチョーフ自身、スターリン時代に権力の最高峯にあった。彼は、大粛清の時、1935年から38年にかけてモスクワの党組織の第一人者であり、1938年1月から1947年3月までウクライナの党の第一書記であった。44年から47年まではウクライナの首相をかねていた。47年12月からウクライナの第一書記にもどり、49年12月から党中央委員会書記で同時に党モスクワ委員会の第一書記になった。この経歴からわかるように、スターリン批判の中心人物は、スターリン時代に、首都の最高責任者であり、ウクライナ共和国の指導者であり、党中央の幹部であった。

なぜスターリン時代に沈黙していたのか、という問がフルシチョーフに、そして、党全体にむかってだされるのはさげられない。

党中央は、『個人崇拜とその所産の克服について』でこれに答えようとした。

「中央委員会のレーニンの中核は、スターリンの死後すぐに、個人崇拜とその重い所産との決定的な闘いの道に入った。

疑問がおこるかもしれない。なぜ、この人たちは、スターリンにたいして公然と反対せず、彼を指導部からはずさなかつたのかと。あの状況では、これは不可能であった。いうまでもないが、スターリンの特に晩年におこなわれた多くの無法行為が、スターリンの罪であることは、事実が語っている。しかし、これと同時に、ソヴェト人がスターリンを、常に敵の奸策からソヴェトを守り、社会主義の事業のために闘っている人間だとみなしていたことを、わすれてはならない。彼は、この闘いのなかで時どきふさわしくない方法を取り、党生活のレーニンの原則と規範を侵犯した。ここにスターリンの悲劇があった。これらすべては、当時おこなわれていた無法行為にたいする闘いを困難にした、なぜなら、個人崇拜の状況のもとでは、社会主義建設とソヴェトの強化との成功がスターリンに帰せられたからである。

このような状況では、スターリンにたいするどのような反対も人民に理解されなかつただろう、そして、この場合、個人的勇気の不足が問題なのでは決してない。この状況下では、だれがスターリンに反対しようが、人民の支持を得られないのは明らかである。その上、このような状況では、そのような発言は、社会主義の建設事業にたいする反対、資本主義国の包囲のな

かでの党と国全体の統一にたいする極めて危険な破壊工作だと判断されただろう。それに、共産党指導下でソヴェトの勤労者がおさめつつあった成功は、すべてのソヴェト人の心に当然のほこりをうえつけた、そして、次のような雰囲気をつくりだしていった。つまり、個々の誤りや至らなさは、巨大な成功を背にすると取るに足りないものに見え、一方、これらの誤りの否定的な結果は、党とソヴェト社会のますます増大していく生命力によって急速に穴埋めされていくような雰囲気をつくりだしていった。²⁸⁾

民衆によってつくられた個人崇拜の状況下では、党はスターリンに手がだせなかったと、この中央委員会決定は、党から民衆へ責任を転嫁している。あらゆる成功をスターリンに一人占めさせたのは党である。党は民衆をスターリンへ感謝するようにしむけた。

この文書は、責任集団であるはずの党が、民衆に謝罪するかわりに、自分の歴史的な驕の傷を消し去ろうとする試みである。しかし、状況論だけでは、不十分である。だから、民衆に罪人が与えられた。

「多くの事実、特にソヴェトの法律の侵犯の点でのスターリンの誤った行いが、最近になって始めて、スターリンの死のあとで、主としてベリヤー味の正体暴露と保安機関への党による統御を確立したことをきっかけにして明らかになったのだということをも考慮しなければならない。」²⁹⁾

この文は、三つのことを主張している。

- ①われわれは、スターリンの多くの無法行為を知らなかった。
- ②ベリヤーが悪かった。
- ③保安機関は、党の外にあった。

「知らなかった」という弁明は、この時期まで無傷で生きのびてきた人間の口から、しばしば出てきたようである。しかし、スターリン時代には、最高の権力者、スターリンの分身たちの肉身まで犠牲になったのである。たとえば、モーロトフの妻、カガノーヴィチの弟、ミコヤーンの子、スターリンの妻の一族等々。どのような地位にあったものであれ、「知らなかった」と云うことはできない。

「われわれは知らない」、「知るはずもない」という言葉をはく人間がいると聞かされたとき、アフマトヴァは、「その代り私は知っている……そんな連中は殺さなければならない」と強くいった。「福音書に、殺すなかれ、と書いてありますよ」と誰れかが云うと、彼女は、「いや、殺しなさい、殺しなさい」と叫んだ。³⁰⁾

エジョーフ後の保安機関の最高責任者であったベリヤーに罪があるのは当然である。しかし、ベリヤーとその部下の逮捕によって多くのことが始めて党中央に分ったのではなく、舞台裏の細部が始めて分ったのである。

保安機関がスターリン個人に従属し、党の外にあったので、党は、自から犠牲者をだすだけでなく、民衆を見殺しにしてきたのである。新しい党指導部は、自己の免罪をはかることによって、スターリン批判の性格をさらけだした。スターリンは誤りをおかしたが、党は正しかったという弁明

の手品によって党の歴史的無罪を証明するためには、スターリンそのものへの批判を弱めていき、スターリンと党の両方を免罪しなければならなくなる。これは、スターリンの暴政を歴史的事実として公的に認め、批判したフルシチョーフそのものの追放を要求する。この種をフルシチョーフ自からが蒔いた。スターリン批判は、スターリン批判の禁止を孕んでいたのである。八年後に、党はフルシチョーフを追い出し、スターリン時代について沈黙することを民衆に要求し、犠牲者への鎮魂の仕事を反国家的行為とみなすようになる。

二十回、二十二回党大会の時期には、フルシチョーフは、モーロトフ、カガノーヴィチ、マレンコフ等の反対派との闘いのためにも、スターリン批判をおしすすめていかなければならなかった。「個人崇拜の所産の根絶」に反対した彼らは、党から除名された。ブルガーニン首相も、彼らの一味として、追放された。ペーリヤをふくめてスターリンに最も近かった者、あの「半人間たち」が永久にクレムリンから追いだされた。二十回党大会のスターリン批判以後、政敵の失脚が流血や投獄をとまなうことはなくなった。モーロトフはモンゴル大使、マレンコフは水力発電所所長、カガノーヴィチは工場長に任命された。フルシチョーフ自身も、追放されたあと、年金生活者として平穏に余生をおくることができた。これは、スターリン批判の一つの成果である。

5

二十回党大会のあと、1956年3月2日、作家同盟の指導者アレクサンドル・ファジェーエフは、アフマートヴァの手紙にそえて、軍事検察庁本部へ彼女の息子レフ・グミリョーフ釈放についての嘆願書をだした。

ファジェーエフは、レフを収容所に入れておく正当性について、学者、作家たちが疑問に思っているとのべたあと、母親アフマートヴァがソヴェト的愛国者であると強調した。

「彼の母親——ア・ア・アフマートヴァ——は、雑誌『星』と『レニングラード』についての有名な決定のあとで、すばらしいソヴェト的愛国者の態度をつらぬきました。彼女の名前を利用しようとする西側の刊行物のあらゆる試みに決定的な一撃をあたえ、わが国の雑誌にソヴェト的愛国詩をのせました。彼女は、現在、わが兄弟国および西洋と東洋の名詩のきわめて芸術的な翻訳者です。あれほど厳しい決定のあとでの、年老いた大詩人の愛国的で勇敢なふるまいは、文壇に深い尊敬の念をひきおこしました、そしてアフマートヴァは、第二回ソヴェト作家大会の代議員になりました。」³¹⁾

ファジェーエフは、アフマートヴァがやむをえず行った妥協と屈辱の行為を、ソヴェト的愛国主義のふるまいとして宣伝している。「厳しい決定」とは、ジダーノフ批判である。そのあとで「愛国者」としてふるまったとは、外国人の前で、この不当な批判が「絶対的に正しい」と発言させられたことをさす。これは、自分と息子の命を救うためのやむにやまれぬ屈服であった。³²⁾

「ソヴェト的愛国詩」とは、レフの助命とジダーノフ批判後の苦境を脱するために書いた奴隷の

詩——スターリン讃歌とそれに近い詩群をさす。³³⁾

アフマトヴァが「翻訳家」であることは、すでにのべたように、詩を犠牲にしておこなわれている生存形態である。

この三つの点は、詩人にとっては、不本意な軌道修正であり、党と国家にとっては、改心のあらわれである。フアジェーエフは、詩人としての負の行為を「愛国者」としての正の行為に変えた。正と負のこの対極性に、詩人アフマトヴァと権力との関係があらわれている。

レフは、二か月後、5月14日に釈放された。彼は、四十三才になっていた。母親が自分の釈放のために努力しなかったと思いこんでいたレフは、釈放後、母親としっかりとはいかなかった。

レフ釈放によって母親としての目的を達したアフマトヴァは、詩人として大きなやっかいな仕事にとりかからなければならない。それは、『鎮魂歌』の公表である。

政治状況を見誤って、早まった行動にできれば、『鎮魂歌』は公的に抹殺されてしまう。アフマトヴァは、非スターリン化の程度を測定する。どこまで許されるか、と思案しながら待機していた者に、ソルジェニーツインの登場は一つの目安をあたえた。

ソルジェニーツイン自身も、風向きをみながら待機していた作家の一人である。

二十回党大会のあと、シヤラーモフの詩を「自主出版」で読んだソルジェニーツインは、その作者が元の囚人であることに気づく。収容所帰りの男の作品が、「自主出版」であれ、非合法であれ、民衆に読まれている。時代が変わった。しかし、ソルジェニーツインは、沈黙し、ひそかに書きつづける。原稿は、やはりまだ、隠くさなければならない。ちゃんと隠してあるかどうか点検してからでないと、一晩もねむることはできない。³⁴⁾

しかし、二十二回党大会の年1961年には、彼は、もう原稿を隠くすのはやめた。収容所についての作品を、ひどい部分をやわらげてから清書した。「書く仕事」よりも「隠くす仕事」のほうがつらかったので、彼は、「とてもうれしい、解放された気分」になった。³⁵⁾

二十二回党大会は、流血の時代が終ったことをあらためて宣言した。ソルジェニーツインは、「水中から頭をだす頃あいだ」と思って、『新世界』に作品をもちこむ決心をした。1961年11月、囚人仲間であったドイツ文学者レフ・コーペレフが原稿を編集局へ持っていった。

『新世界』の編集長は、詩人アレクサンドル・トヴアルドーフスキイであった。彼は、ソルジェニーツインの作品に感動し、印刷許可を得るために動きはじめた。

ソルジェニーツインの作品は『III-854』と名づけられていた。これは、囚人番号である。これでは検閲をとらぬので、編集局は『イヴァン・デニーソヴィチの一日』と題を変えた。いろいろな小さな変更が、作者の合意をえて行われ、作品世界は少しずつおだやかになっていく。しかしそれでも、検閲が許可しないのは明らかであった。原稿は、直接フルシチョフのところにとどけられた。彼は、この作品を公表するかどうか党幹部会にかけた。幹部会は無言だった。彼は、沈黙は同意と解釈し、公表を許可した。『イヴァン・デニーソヴィチの一日』は、原稿がもちこまれてから一年間の変更と工作と闘いのあとで、『新世界』の1962年11月号に発表された。この作品は全

世界をおどろかせた。世界は、その内容だけでなく、そのような作品の発表を許したソヴェトの変化におどろいたのである。

トヴァルドーフスキイは、『序文に代えて』という一文を作品の冒頭につけて、文学芸術にとって禁断の領域があってはならないと主張し、ソヴェト文学がスターリン時代の「病的な現象」を立入禁止区域にしないよう示唆した。彼は、ソルジェニーツインの作品が「希望のない打ちひしがれた感じ」と無縁であるのは、云わなければならないことを云えない状態から心を解き放ってくれるかのような作品だからである、と書いた。

作品は、ソヴェト人の心に耐えがたいわだかまりとなって残っていながら、いかなる表現も禁じられてきたものを、芸術的に表現することによって、読者に長年の沈黙から解放されたような気持ちをいだかせる。

「この厳しい中篇小説は、現在、ソヴェトの芸術家の活動領域から除外され、正しく描写することが出来ないような現実の分野も現象もないということのもう一つの例である。」³⁶⁾

トヴァルドーフスキイのこの一文は、『鎮魂歌』を記憶のなかに保管して待ちかまえているアフマートヴァにとって、大きな励ましである。彼女は、1957年4月1日に『鎮魂歌』へ『序文の代りに』を、1961年に題銘（巻頭の四行）をつけて、発表の準備をしていた。

1962年5月、トヴァルドーフスキイが『イヴァン・デニーソヴィチの一日』のために闘っていたころ、アフマートヴァは、記憶係チウコーフスカヤが『鎮魂歌』を全部おぼえているかどうか試めすために、盗聴の心配のない公園へ彼女をつれだした。チウコーフスカヤは、二十数年前に覚えた詩を暗唱した。

「わたしは、一つのこらずみな読んだ。今、紙に書くつもりですか、とわたしはたずねた。『分からない』と彼女は答えた。この答えから、当分のあいだまだ紙に書き移す権利は、わたしにもないのだと分った。」³⁷⁾

アフマートヴァは、まだ原稿をもつことをためらっている。彼女は、チウコーフスカヤ以外にも七人が『鎮魂歌』を暗記していることを打ちあげた。これは、当然の処置である。いつだれが消えるか分からない時代に、一人だけの記憶にたよるのは危険だった。

アフマートヴァは、もちろん、『鎮魂歌』の印刷について考えていた。チウコーフスカヤは、印刷される日まで二人は生きていられるか、と心配していた。この時、アフマートヴァは七十三才、チウコーフスカヤは五十五才である。

『イヴァン・デニーソヴィチの一日』の写しが、印刷許可がおりる前に何者かによって、「自主出版」^{サミズダート}の流れに放たれた。アフマートヴァは、それを読んだ。「この中篇小説は、ソヴェトの二億の市民の一人一人が読んで暗記すべきです」³⁸⁾、と彼女はチウコーフスカヤにいった。

1962年10月29日、『鎮魂歌』の終歌だけがタイプで打たれ原稿になった。『鎮魂歌』は、一部分とはいえ、記憶という秘密の場所から白日のもとへ出された。

アフマートヴァは、その断片の原稿に記入する。

「1940年3月10日ごろ

噴水邸

1962年10月29日原稿

モスクワ」³⁹⁾

これは、詩が、創られてから二十二年半のあいだ記憶されていたことを示す。

やがて、『イヴァン・デニーソヴィチの一日』が発表され、時代の変化は明らかになった。それから一か月後、チウコーフスカヤは、詩人と記憶係の祭りを記録する。

「大事件。『鎮魂歌』が完全に書き移された。タイプで原稿が数部つくられた。こうして奇蹟がゆるぎないものになった。わたしのように『鎮魂歌』を暗記しなければならない七人あるいは十一人の人間が、一度に死んでしまっても、『鎮魂歌』は、なくなるのだから。わたしは、ニーカによってつくられた原稿を、うやうやしく手にとった。灰皿のうえでこれらの言葉を燃やす必要は、今となっては、もうないのだ、ないのだ、ないのだ、解き放たれたこれらの言葉は、今度は、『人びとの心を燃やす』だろう。」⁴⁰⁾

『鎮魂歌』にとって、暗記保存の時代は終わった。次の仕事は、この原稿を合法的に活字にすることである。

チウコーフスカヤは、「ソヴェトの雑誌のなかで最も大胆で最も知的な」『新世界』が、発表場所としてふさわしいと思っていた。⁴¹⁾ 真の非スターリン化のためにも、『鎮魂歌』の公表は不可欠であると、彼女は考えた。

「『鎮魂歌』の印刷のために闘うことは、どうしても必要である、なぜなら、『スターリンの個人崇拜の結果としての社会主義的法律の大量の侵犯』という図式は、何の役にもたたないからである。それは、あらゆるお役所発明と同じく、空っぽで、生命がない。お役所式のやり方は、言葉の生き生きした内容を骨ぬきにするために、犯罪を**あばく**ためではなく、**かくす**ために、考えだされたのである。」⁴²⁾

『鎮魂歌』の印刷のめどがたたないまま、原稿はいつのまにか海外にもちだされ、次の年1963年アフマートヴァに無断で、ミュンヘンで出版された。このような形で海外で出版されたものは、ソヴェトで公的に出版されない。この出版は、ソヴェトでの公刊を妨害するだけでなく、彼女には、当局によって責任を追求されるのではないかという心配のたねになった。⁴³⁾

次の年1964年、アフマートヴァは七十五才になった。これを記念して、『新世界』は、アンドレイ・シニヤフスキイの『枷をはずされた声』をのせた。

シニヤフスキイは、世界文学研究所の研究員であった。彼は、アブラム・テルツという名で作品を外国で発表していた。極秘の二重生活をすることによって、彼は、文学者としての活動をなりたせた。

シニヤフスキイは、公認のアフマートヴァ像がさわめて狭いかたよったものであると指摘し、彼女が印刷を許されていない詩をスターリン時代に創ったこと、『鎮魂歌』の作者であることをほの

めかす。『鎮魂歌』は、許されていないので、題も内容も具体的に示すことはできない。彼が読者に伝えることができたのは、題銘の四行だけである。

「アフマートヴァ自身にとって個人的な大きな悲劇になったエジヨーフの恐怖政治についての詩句を引いてみよう。

いや、異国の空の下でも、
 異人の翼の下でもない、
 私はそのとき私の民衆と共にいた、
 不幸にも私の民衆がいた所に私はいた。」⁴⁴⁾

シニヤフスキイは、この引用によって、アフマートヴァが「母国の生活に無縁で、民衆の運命に無関心な」⁴⁵⁾存在でないこと、全くその逆の民衆詩人であることを読者に告げる。このことによって、彼は、固定されたアフマートヴァ像を拡大する。これは、事実上、ジダーノフ批判の否定である。

シニヤフスキイとアブラム・テルツは、同一人物だとつきとめられ、彼は、次の年1965年9月に逮捕された。彼の二重生活は、収容所における七年の労働という代価を払うことになった。

シニヤフスキイがアフマートヴァの民衆性を強調してから数カ月後、10月14日、フルシチヨーフは、だましうち的に、首相も党の第一書記も解任され、年金生活者になった。代ってブレージネフが第一書記になり、非スターリン化政策は打ち切られた。スターリン時代の「病的現象」について語ることは、犯罪行為になる。ソルジェニーツインは、国賊として迫害され始めた。

スターリン時代の民衆の苦しみについての記憶を抹殺する国家事業がはじまる。

七十五才のアフマートヴァが生きている間に、『鎮魂歌』が公認される可能性は無くなった。

6

二十回党大会は、アフマートヴァを活字の世界へ復帰させた。この党大会（1956年）からアフマートヴァの死（1966年）までの十年間に、彼女の選集が三冊ソヴエトで発行された。この三冊に、スターリン批判がもたらした変化とその限界とがみごとに反映されている。

一冊目は、1958年25,000部で発行された。⁴⁶⁾編集は、アレクサンドル・スルコーフである。詩と翻訳との二部に分れている。詩の部には、1909年から1957年までの作品から75篇おさめられている。

鎮魂の詩は、『ヴォローネシ』だけである。しかし、最後の四行⁴⁷⁾は、初出と同じく、はぶかれている。したがって、この詩は、冬の町を詠んだ叙景詩となり、主題は隠くされたままである。このため、この選集には、スターリン時代の犠牲者を歌った作品は、事実上、はいていないのと同じである。アフマートヴァが詩人としての存在をかけて創った作品群は、この本の外に、空しく出番をまっている。この詩集が与えるアフマートヴァ像は、シニヤフスキイのいう公的な狭い像である。

二冊目は、1961年50,000部で発行された。⁴⁸⁾『ソヴェト詩文庫』の一冊である。この文庫の編集委員会には、アレクサンドル・トヴァルドーフスキイも入っている。この小さな選集には、1909年から1960年までの詩がおさめられている。冒頭に『自分について簡単に』というアフマートヴァアの自伝がかかげられている。巻末には、スルコーフの解説がのっている。

この選集には、犠牲者についての詩が三つ入っている。

- ① 『石の言葉が落ちた……』
- ② 『ヴォローネシ』
- ③ 『この全てを解き明かせるのはあなただけ』

①は、『鎮魂歌』の第七歌である。これは、真の内容をぼかして1940年に印刷することに成功した詩である。⁴⁹⁾この選集でも、初出と同じように、偽装してのせられている。

②は、1958年の選集と同じあつかいである。

③は、1938年につくられたが、1942年と偽りの創作年度がしるさされている。これは、1937年に殺された作家ボリス・ピリニヤークにささげられた詩である。彼の死を悼んだ詩であることを隠すために、時がずらされた。1961年でもアフマートヴァアは、このような操作が必要だと考えた。

この全てを解き明かせるのはあなただけ……

不眠の闇がまわりで沸立つとき、
太陽の、すずらんあの楔が
十二月の夜の闇へ入りこむ、——
私は小道をつたってあなたのところへ行く。
あなたは無邪気に笑う。
しかし針葉樹の森と池の葦が
奇妙な山びことなって応じる……
ああ、もしこの山びこで死者を目覚めさすなら、
ごめんなさい、ほかに話しようがない。
私はあなたのことを身内のように悲しみ
谷底に横たわっている人びとについて……
泣く人
この恐ろしい時に泣くことのできる人すべてを
私はうらやむ。
涙は目にとどかないうちに沸騰し、
私の目をうるおすことがなかった。⁵⁰⁾

アフマートヴァアは、1938年から1942年へと創作年度をずらせることによって、「谷底に横たわっている人びと」、死者の群れを、独ソ戦での戦死者だととれるように操作した。独ソ戦が1941年に始まったので、詩の誕生を1942年にしたのである。独ソ戦の戦死者への涙だといつわり、みせかけ、

スターリンの暴政の犠牲者に涙をながすことができた民衆の立場と、この詩の創作年度の操作とは、同根である。

『自分について簡単に』は、『鎮魂歌』に関連した自伝的事実について沈黙している。グミリヨーフと結婚したことも、レフが生れたことすら隠くされている。これは、政治的見地から整理された自伝である。⁵¹⁾ 官製の狭いアフマートヴァ像に、彼女は自からあわせた、いや、あわせざるをえなかった。ただ最後の一節だけが彼女の本当の人生を暗示している。

「この本の読者は、私が詩を書くのをやめたことがないのを知るだろう。私には詩のなかに——時代と私の民衆の新しい生活とのつながりがある。私がそれらの詩を書いていたとき、国の英雄的な歴史のなかでひびいていた律動に合わせて、私は生きていた。この時代に生き、ならばものない出来事を見てきたので、私は幸せである。」⁵²⁾

アフマートヴァは、最もおそろしい時代に沈黙していたという彼女にまつわる固定観念を否定している。彼女には、かっこ付きの沈黙以外には、沈黙の時期などなかった。彼女は、半生をふりかえって、自分が歴史のなかで、民衆と共にいたと語る事ができる。そのさい、ソビエトのという形容詞がつくのが習わしであるのに、彼女は、「私の民衆」という。『鎮魂歌』の題銘でもそうである。「私はそのとき私の民衆と共にいた、不幸にも私の民衆がいた所に私はいた。」「私の民衆」とは、ソヴェト人から権力者や刑吏や獄卒や政治警察などを除き去ったあとに残る、苦しんでいる民のこと、私が同じ苦しみをうけ、私が苦しみを共にしうる民のことだろう。

巻末のスルコーフの解説は、ソヴェトにおけるアフマートヴァ像の鋳型である。これ以後のアフマートヴァ選集につけられる解説は、この鋳型からつくられることになる。

スルコーフは、アフマートヴァを「愛国者」にする。「愛国者」であるとは、「私の民衆」とのかわりではなく、党と政府のその時どきの方針や路線にたいする忠実さを意味する。彼は、アフマートヴァの世界から、この愛国的なものをとりだし、アフマートヴァ像をつくる。五つの詩の引用によって、彼女の詩人としての歩みがあとづけられる。それは、①亡命拒否を歌った詩（1917年）②『勇氣』（1942年）③『誓い』（1941年）④『勝利』（1942-45年）⑤『平和の歌』（1950年）である。

この五つの詩をたどっていけば、詩人は、亡命のさそいを拒否して革命後の祖国にとどまり、第二次大戦中は戦意高揚の詩をつくり、戦争後は、スターリンのおかげでおとずれた平和をたたえる詩を書いたことにつきる。大粛清の時は、空白であり、沈黙ということになる。

このアフマートヴァ像は、一つの提案である。もし詩を発表したければ、あるいは、この選集をだしたければ、この鋳型のなかに入りなさい、という条件呈示である。この鋳型のなかから詩人は活字の世界へ放たれる。

アフマートヴァは、詩人として、二重の生活をおくってきた。ソヴェトにおけるアフマートヴァ像も二重になる。スルコーフ型の像と、「私の民衆」の苦しみを歌った葦笛の詩人⁵³⁾、鎮魂の詩人としてのアフマートヴァ像とが共存する。記憶根絶の政策がつづく限り、この状況は変らない。

スルコーフは、もちろん、ジダーノフ批判を肯定する。

「戦後の第一年目に、何人かのソヴェトの詩人の詩に疲れとふさぎとの退廃的な調子があらわれた。これは、アフマートヴァにもおよんだ。一連の彼女の詩には、永久に克服されたと思われたものが、ひびきだした。1946年この傾向は厳しい社会的非難をあげた。」⁵⁴⁾

これは、戦時中に書いた戦意高揚の詩とは全くちがった詩をアフマートヴァが書いたことにたいする不満と批判の表明である。

スルコーフは、アフマートヴァが息子の命ごいのために書いたスターリン讃歌の入った『平和に栄あれ』という詩群を歓迎する。彼は、これを、戦時中に公表された詩の継承だと評価した。スルコーフが愛国詩人アフマートヴァを組立てた材料は、ファージェエフがレフ釈放のために書いた手紙のなかでアフマートヴァの愛国者的特徴としてあげているものと、同質である。

スルコーフ製の愛国者は、『鎮魂歌』をつくるはずがない。アフマートヴァは、『愛国者』としてかかえられることによって、『鎮魂歌』は、公的に葬られる。

三冊目の選集は、『時の疾走』である。⁵⁵⁾ 1965年50,000部で発行された。これは、生前最後の作品集である。

『鎮魂歌』からは、『石の言葉が落ちた…』と『磔』^{はりつけ}が入っている。前者は、創作年度が1934年という偽装ではなくて、この版で始めて1939年という本当の時が明記された。しかし、『判決』という題は、ぬかしたままである。この題は、詩の内容をあからさまに示すので、無題になったとおもわれる。

『磔』は、『鎮魂歌』の第十歌である。その半分だけが収められた。

マグダリーナはのたうち泣いた、
愛弟子は石のようになった、
母が黙って立っている方へは、
だれも目をやる勇気がなかった。⁵⁶⁾

この詩は、無害である。これは、『鎮魂歌』の世界から切り取られ、死んだ断片として印刷されているので、十字架上のキリストが無実のソヴェト人であり、マリヤはその母親であり、個人的には、キリストはレフであり、母はアフマートヴァであり、マグダリーナと弟子とはその近く親しい人であることなど誰れにもわからない。第十歌の半分が印刷されたことは、『鎮魂歌』の部分的解禁を意味しない。

この選集ではじめて、『ヴオローネシ』の最後の四行が印刷された。しかも、オーシプ・マンデリシタームの頭文字が冒頭にかかげられているので、読者は、多くのことを理解できる。このようにまともな形で印刷されるには、つくられてから二十九年の年月が必要であった。

『この全てを解き明かせるのはあなただけ…』は、この版では、創作年度が1942年という偽装でなく、1938年と本当の年が記されている。

生涯最後の詩集を手にしたとき、アフマートヴァは、七十六才の病身の老婆になっていた。彼女の生前最大のこの詩集は、彼女の半世紀以上の詩人としての仕事をいれる器になることはできな

かった。鎮魂と葦笛の詩の群れは、この本の外に、民衆の無数の手がつくりだす「自主出版」の流れのなかにのみ生きていた。

(連作第三部おわり)

注

- 1) Варлам Шаламов, Колымские рассказы, 2-ое издание, YMCA-PRESS, Paris, 1982, стр. 380-381.
- 2) 拙論「『鎮魂歌』の時代」(連作第一部)大阪外国語大学学報(文学篇)第六十七号(1984年)参照。
- 3) クレムリンの医師団が、党と政府の指導者を殺し、殺そうとしているとして逮捕された。彼らの多くは、ユダヤ人であった。
- 4) Осип Мандельштам, Собрание сочинений, Издание второе, т. 1, Inter-Language Literary Associates, Washington 1967, стр. 202.
- 5) 同上
- 6) 同上
- 7) スターリンは、グルジア人ともオセチン人ともみられていた。
- 8) Мандельштам, т. 1, стр. 202.
- 9) スターリンとマンデリシタームの会話は、アフマートヴァの証言(Анна Ахматова, Сочинения, т. 2, Inter-Language Literary Associates, Washington, 1968, стр. 183.) から再現した。ナジェージダ・マンデリシタームも同じ内容の記録を残している。
Надежда Мандельштам, Воспоминания, Издательство имени Чехова, New York, 1970, стр. 153.
- 10) Testimony. The Memoirs of Dmitri Shostakovich, Harper & Row, New York, 1979, p.96.
- 11) Надежда Мандельштам, Воспоминания, стр. 216.
- 12) 同上 220頁
- 13) 同上 220頁
- 14) Анна Ахматова, Сочинения, т. 2, стр. 179.
- 15) Надежда Мандельштам, Вторая книга, стр. 296.
- 16) Лидия Чуковская, Записки об Анне Ахматовой, т. 1, YMCA PRESS, Paris, 1976, стр. 89.
これは、1940年5月の時点である。
- 17) Testimony. p.218.
- 18) 同上
- 19) 同上
- 20) Петр Павел Рубенс, Письма, перевод А. А. Ахматовой, редакция и предисловие А. М. Эфроса, Москва, 1933.
発行部数5300。手紙の原文は、ほとんどがイタリヤ語で、その他フランス語、フラマン語、ラテン語のものもある。著者は、この本をエルミターージュ(レニングラード)の付属図書館から借用した。
- 21) Голоса поэтов в переводе Анны Ахматовой, Прогресс, Москва, 1965.
Лирика древнего Египта, перевод Анны Ахматовой и Веры Потаповой, Художественная литература, Москва, 1965.
Джакомо Леопарди, Лирика, переводы Анны Ахматовой и Анатолия Наймана, Художественная литература, Москва, 1967.
著者未見のものでは
Корейская классическая поэзия, переводы А. Ахматовой, Художественная литература, Москва, 1956, 1958.
- 22) Лидия Чуковская, Записки об Анне Ахматовой, т. 2, стр.10.
- 23) 同上
- 24) Надежда Мандельштам, Вторая книга, стр.60.
- 25) Варлам Шаламов, Колымские рассказы, стр. 554.

『鎮魂歌』の運命

- 26) Абдурахман Авторханов, Технология власти, Посев, Frankfurt/Main, 1976, стр. 610.
- 27) ヴィシーンスキイは、革命前メンシエヴィークであった。彼は、ボリシェヴィキが完全に勝利した1920年に入党した。この過去の傷にもかかわらず検事総長になれたのは、弱味をスターリンに担保としてとられ、そのため絶対的に盲従することになり、出世したのかもしれない。彼は、自白を有罪の決め手とする「理論」を打ちたて、スターリン時代の無法行為を理論的に承認した。彼は、外務大臣になり、スターリン批判以前に無傷のまま死んだ。
- 28) Борьба КПСС за завершение строительства социализма/1953-1958годы/, Госполитиздат, Москва, 1961, стр. 477-478.
- 29) 同上 478頁
- 30) Лидия Чуковская, Записки об Анне Ахматовой, т. 2, стр. 439.
- 31) Анна Ахматова, Сочинения, т. 2, стр. 389.
- 32) 拙論「詩神と権力」(連作第二部) 大阪外国語大学学報(言語・文学篇)第六十八号(1985年) 参照。
- 33) 同上
- 34) А. Солженицын, Бодался теленок с дубом, YMCA PRESS, Paris, 1975, стр. 19.
- 35) 同上
- 36) Новый мир, No. 11, 1962, стр. 8.
- 37) Лидия Чуковская, Записки об Анне Ахматовой, т. 2, стр.412.
- 38) 同上 431頁
- 39) 同上 453頁
- 40) 同上 473頁
- 41) 同上 485頁
- 42) 同上 485頁
- 43) この版(初版)には、作者に無断で出版したと明記されている。アフマートヴァを免責するためだろう。
- 44) Новый мир, No.6, 1964, стр. 174.
- 45) 同上
- 46) Анна Ахматова, Стихотворения, Художественная литература, Москва, 1958.
- 47) 寵を失った詩人の部屋では／恐怖と詩神が交代で番をする／夜明けを知らない／夜がふけていく
- 48) Анна Ахматова, Стихотворения/1909-1960/, Художественная литература, Москва, 1961.
- 49) 「詩神と権力」参照。
- 50) Анна Ахматова, Стихотворения/1909-1960/, стр. 209.
- 51) 検閲で次の二カ所がけずられた。
 1. С середины 20-х годов мои новые стихи почти перестали печатать, а старые — перепечатывать.
 2. Потом, после ареста сына, сожгла вместе со всем архивом.
- 52) Анна Ахматова, Стихотворения/1909-1960/, стр. 10.
- 53) 「詩神と権力」参照。
- 54) Анна Ахматова, Стихотворения/1909-1960/, стр. 303-304.
- 55) Анна Ахматова, Бег времени, Советский писатель, Москва-Ленинград, 1965.
- 56) 同上 272頁